

汚いはきれい？ ディケンズとギッシングのスラム街の考察

小宮彩加

ジョージ・ギッシングは、チャールズ・ディケンズよりも45才年下の小説家である。ギッシングが生まれた1857年には、ディケンズは『リトル・ドリット』の連載を終え、その人気は不動のものになっていた。ギッシングの父親もディケンズの愛読者だったので、ギッシングの子供時代からディケンズの作品が身近にあったようだ。1901年にギッシングが書いた「ディケンズの思い出」というエッセーには、居間のテーブルに『われらの共通の友』の緑色の表紙の月間分冊が置いてあったという子供の頃の記憶や、ディケンズの突然の死を悼んでルーク・ファイルズが描いた「主のいない椅子」の版画（図1）が子供部屋に飾られていたことなどが書かれている¹⁾。ディケン

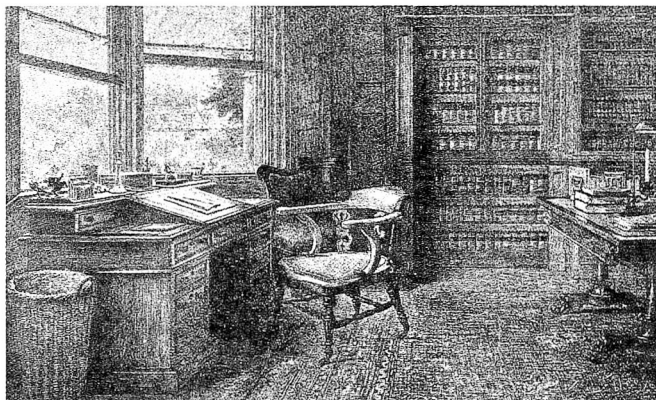


図1 'The Empty Chair' by Sir Luke Fildes

汚いはきれい？ ディケンズとギッシングのスラム街の考察

小 宮 彩 加

ジョージ・ギッシングは、チャールズ・ディケンズよりも45才年下の小説家である。ギッシングが生まれた1857年には、ディケンズは『リトル・ドリット』の連載を終え、その人気は不動のものになっていた。ギッシングの父親もディケンズの愛読者だったので、ギッシングの子供時代からディケンズの作品が身近にあったようだ。1901年にギッシングが書いた「ディケンズの思い出」というエッセーには、居間のテーブルに『われらの共通の友』の緑色の表紙の月間分冊が置いてあったという子供の頃の記憶や、ディケンズの突然の死を悼んでルーク・ファイルズが描いた「主のいない椅子」の版画（図1）が子供部屋に飾られていたことなどが書かれている¹⁾。ディケン

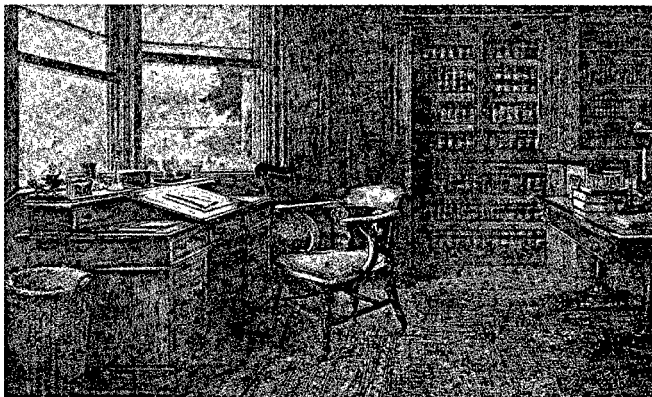


図1 'The Empty Chair' by Sir Luke Fildes

ズは1870年6月9日に亡くなったが、その半年後にはギッシングの父親も他界した。そのとき13才だったギッシングにとって、ディケンズは、父がいた幸せな子供時代の思い出と結びつき、生涯その心の中で特別な位置を占める作家となった。

ギッシングが小説家を志して1877年にロンドンに出てきたとき、彼は、ディケンズの小説の世界に足を踏み入れたようだを歓喜した。ロンドンに出てきた当時を振り返って、ギッシングは次のように書いている。

When, seven years after [Dickens's death], I somehow found myself amid the streets of London, it was a minor matter to me, a point by the way, that I had to find the means of keeping myself alive; what I chiefly thought of was that now at length I could go hither or thither in London's immensity seeking for the places which had been made known to me by Dickens.... I now had leisure to wander among the byways, making real to my vision what hitherto had been but names and insubstantial shapes.

(*Collected Works* 1: 49)

ギッシングは、ディケンズの小説に出てきた地名を地図で探しては、ロンドン中を歩き回った。そうして、ギッシング自身もロンドンに詳しくなり、ロンドンを舞台にした小説を書くようになったのだった。処女作『曙の労働者たち』(1880)をはじめ、初期の作品は、ディケンズの小説と重なる場所を舞台としていることが多い。

やがて、ギッシングもディケンズと同じようにロンドンをよく知る作家として評価されるようになった。チャールズ・ブースが1886年から89年に行った貧困の調査をまとめた『民衆の生活と労働』(1889)の中でも、イーストエンドの住民たちの暮らしについて知りたければギッシングの小説を読むと

よい、と推薦されているほどだ²⁾。

このように、ロンドン、特にロンドンの下層社会を描くことを得意としたディケンズとギッシングではあるが、スラム街の描き方からは、二人の小説家としてのアプローチの違いを見ることができる。本稿では、ディケンズの『荒涼館』（1852-53）に出てくるトム・オール・アローンズ（Tom-all-Alone's）と、ギッシングの『ネザー・ワールド』（1889）に出てくるシューターズ・ガーデンズ（Shooter's Gardens）という2つのスラム街を取り上げて、比較し、考察する。



図2 『荒涼館』46章の挿絵「トム・オール・アローンズ」

トム・オール・アローンズというのは一風変わった地名である。『荒涼館』には、最初「トム・オール・アローンズ」というワーキング・タイトルがつけられており、そこに暮らす交差点掃きの浮浪児ジョーを中心とした物語になる予定だった。プロットはだいぶ変更されたが、トム・オール・アローンズは『荒涼館』でも重要な場所である。実在した地名を出すディケンズの作

よい、と推薦されているほどだ²⁾。

このように、ロンドン、特にロンドンの下層社会を描くことを得意としたディケンズとギッシングではあるが、スラム街の描き方からは、二人の小説家としてのアプローチの違いを見ることができる。本稿では、ディケンズの『荒涼館』(1852-53)に出てくるトム・オール・アローンズ (Tom-all-Alone's) と、ギッシングの『ネザー・ワールド』(1889)に出てくるシューターズ・ガーデンズ (Shooter's Gardens) という2つのスラム街を取り上げて、比較し、考察する。



図2 『荒涼館』46章の挿絵「トム・オール・アローンズ」

トム・オール・アローンズというのは一風変わった地名である。『荒涼館』には、最初「トム・オール・アローンズ」というワーキング・タイトルがつけられており、そこに暮らす交差点掃きの浮浪児ジョーを中心とした物語になる予定だった。プロットはだいぶ変更されたが、トム・オール・アローンズは『荒涼館』でも重要な場所である。実在した地名を出すディケンズの作

品としては珍しく、架空の場所であるが、ハウボーンのポーツマス・ストリートから南東にかけてあったウィッチ・ストリートのあたりがトム・オール・アローンズの場所だと想定されている。しかし、フィズの挿絵（図2）を見る限り、ウィッチ・ストリートだけではなく、いくつかのスラム街を参考にディケンズが考案したようだと言われている。ジョーが暮らすトム・オール・アローンズは次のようなところだ。

Jo lives — that is to say, Jo has not yet died — in a ruinous place, known to the like of him by the name of Tom-all-Alone's. It is a black, dilapidated street, avoided by all decent people; Now, these tumbling tenements contain, by night, a swarm of misery. As, on the ruined human wretch, vermin parasites appear, so, these ruined shelters have bred a crowd of foul existence that crawls in and out of gaps in walls and boards; and coils itself to sleep, in maggot numbers, where the rain drips in; and comes and goes, fetching and carrying fever, and sowing more evil in its every footprint[.]

(*Bleak House*, Chapter 16)

また、ジョーを探しにいったスナグスビー氏が初めてトム・オール・アローンズに足を踏み入れた場面では

Mr Snagsby passes along the middle of a villainous street, undrained, unventilated, deep in black mud and corrupt water — though the roads are dry elsewhere — and reeking with such smells and sights that he, who has lived in London all his life, can scarce believe his senses.

(*Bleak House*, Chapter 22)

と書かれている。これらのトム・オール・アローンズの描写で使われている単語 (dilapidated, vermin, parasites, maggot, mud, corrupt water, smell) から伝わってくるイメージは、水はけが悪く、悪臭に満ち、空気の淀んだスラム街の狭い部屋に、何人もの人がウジ虫や寄生虫のように密集して暮らしている様子だ。これでもディケンズの読者には十分に衝撃的な描写だったのかもしれないが、曖昧で比喩的な表現が多く、劇的ではあるが直接五感に訴えてくるような描写ではない。ブラウントが指摘しているように、ディケンズは読者にあまり嫌悪感を抱かせないように心を砕いているのである³⁾。

当時の実際のスラム街の住環境は、もっと惨憺たるものだった。1849年7月5日のタイムズ紙に、スラム街に住む54人の連名で、スペリングの間違いだらけの陳情書が載った。

Sur,

May we beg and beseech your proteckshion and power. We are Sur, as it may be, livin in a Wilderniss, so far as the rest of London knows anything of us, or as the rich and great people care about. We live in muck and filth. We aint got no priviz, no dust bins, no drains, no water-splies, and no drain or suer in the hole place. The Suer Company, in Greek St., Soho Square, all great, rich and powerfool men, take no notice watsomdever of our complaints. The Stenche of a Gully-hole is disgustin. We all of us suffer, and numbers are ill, and if the Colera comes Lord help us.

Some gentlemans comed yesterday, and we thought they was comishioners from the Suer Company, but they was complaining of the noosance and stenche our lanes and corts was to them in New Oxforde Streect. They was much surprized to see the seller in No. 12, Carrier St., in our lane, where a child was dyin from fever, and

would not believe that Sixty persons sleep in it every night. This here seller you couldn't swing a cat in, and the rent is five shillings a week; but there are greates many sich deare sellars. Sur, we hope you will let us have our complaints put into your hinfluenshall paper, and make these landlords of our houses and these comishioners (the friends we spose of the landlords) make our houses decent for Christions to live in. Preaye Sir com and see us, for we are living like pigs, and it aint faire we shoulde be so ill treted.

彼らが暮らすスラム街には、便所もゴミ箱も下水道も上水道もないので、当然汚く、ひどい悪臭がする。そして夜になると寝場所を求めて人が集まってくるので、小さな一部屋に60人もが寝泊まりをしているというのだ。ディケンズが「泥と汚れた水 (mud and corrupt water)」と控えめに表現しているものは、投書でははっきりと「泥状の糞尿と汚物 (muck and filth)」と表現されている。ディケンズが「みじめな人々の溜まり場 (a swarm of misery)」! といっているのは、現実には60人もが一部屋に寝泊まりしている状態だ、とわかる。この投書からは実際のスラムの惨状が臭いと共に伝わってくるようだ。これをディケンズが目にしたかどうかは断言できないが、衛生問題に強い関心を持っていたことから、おそらくこの投書も読んでいただろう。ディケンズは下層階級の人々の住まいの衛生問題には心を痛めており、1849年の『マーティン・チャズルウィット』の序文にも、

In all my writings, I hope I have taken every available opportunity to showing the want of sanitary improvements in the neglected dwellings of the poor.

と書いており、貧民たちの住居の衛生状態の悪さに注目するべきだと述べている。さらにディケンズは、都市衛生協会主催の晩餐会に2度（1851年2月、1851年5月）招待され、そこでスピーチもしている。都市の衛生問題の改善に向け、社会が動かなくてはいけないと繰り返し主張していた。

Searching Sanitary Reform must precede all other social remedies, and even Education and Religion can do nothing where they are most needed, until the way is paved for in their ministrations by Cleanliness and Decency.⁴⁾

このように『荒涼館』を執筆していたころのディケンズは、スラム街の衛生問題の解決は何よりも優先すべき課題と考えていたのである。

こうして都市の衛生問題を最重要事項と感じていたディケンズは、『荒涼館』でスラム街のトム・オール・アローンズを描くことで惨状を訴え、社会を動かそうとしたのだ。『荒涼館』では、トム・オール・アローンズが発生源の天然痘により、ジョーが死に、エスターにも病気がうつる。エスターはなんとか命を取り留めたものの、病気の跡が顔に醜く残ってしまう。ディケンズは、「まさしく感染と略奪と破壊を通じて、トムは復讐を果たすのである」（Chapter 46）と書いているが、スラム街で発生し、スラム街の外へとどんどん感染を広げる伝染病は、衛生問題を無視し続けてきた政治家や有権者たちへの「トムの復讐」として描かれるのだ。

さて、実は、ギッシングはディケンズ作品の批評家としても高い評価を受けていた。ギッシングが書いた『チャールズ・ディケンズ論』（1898年）やロチェスター版ディケンズ全集の序文について、エドモンド・ウィルソンは、「ディケンズについて英語で書かれたものの中でも最高だし、イギリス人によって世紀の変わり目に書かれた文学批評としても最高のものである」と絶賛している。（Wilson 2）そのギッシングが挙げるディケンズの『荒涼館』

の弱点は2つある。ひとつ目はリアリズムの欠如、もうひとつはディケンズの慈善家としての面が強く出ている点である。ギッシングのいう通りで、たとえば、次に挙げるトム・オール・アローンズの夜の描写にはリアリズムの微塵もない。ディケンズはスラム街をトムという名前で擬人化し、「トムはぐっすり眠っている」などと表現する。

Darkness rests upon Tom-all-Alone's. Dilating and dilating since the sun went down last night, it has gradually swelled until it fills every void in the place. For a time there were some dungeon lights burning, as the lamp of Life hums in Tom-all-Alone's, heavily, heavily, in the nauseous air, and winking — as that lamp, too, winks in Tom-all-Alone's — at many horrible things. But they are blotted out. The moon has eyed Tom with a dull cold stare, as admitting some puny emulation of herself in his desert region unfit for life and blasted by volcanic fires; but she has passed on and is gone. The blackest nightmare in the infernal stables grazes on Tom-all-Alone's, and Tom is fast asleep. (*Bleak House*, Chapter 46)

ディケンズは常に読者を不快にさせないことを第一に心がけていたので、スラム街やそこに暮らす下層階級の人々の描写も、むしろリアスティックにならないようにしていたのである。『チャールズ・ディケンズ論』の中でギッシングが指摘しているように、「不快なものは芸術にそぐわない題材として退けることがディケンズの方針だった」(*Collected Works*, 2: 70) のだ。さらに、「芸術は自然でないからこそ芸術」(*Collected Works*, 2: 66) というのが、ディケンズの信条だった。ギッシングは、あらゆる文学作品の中でもっとも非現実的で不自然な場面は、『荒涼館』の少年ジョーの臨終の場面だとロチェスター版の『荒涼館』の序論で書いている。

Does there, I wonder, exist in all literature, a scene less correspondent with any possibility of life than that description of Jo's last moments?
(*Collected Works* 1: 176-77)

もちろん、不自然だからと言ってディケンズ作品の文学的価値を否定するわけではない。ただ、ディケンズのような作品は、19世紀末の小説家の抱く芸術観とは相容れなかったというわけだ。ギッシングは、どんなに不快な光景であろうとも目をそむけずに、ありのままを描くことを目指した。ギッシングは2作目の小説 *The Unclassed* の中で、自分の分身のような作家ウェイマークに、自らが目指す小説について、ディケンズに言及しながら語らせている。

We must dig deeper, get to untouched social strata. Dickens felt this, but he had not the courage to face his subjects; his monthly numbers had to lie on the family tea-table.

(*The Unclassed*, Chapter 15)

このころのギッシングは、作品がどう受け止められようとも、自らの目指す芸術を追究していたのである。

もうひとつ、ディケンズについてギッシングが批判していたのは、ディケンズに慈善家の顔と芸術家の顔があり、「残念なことに、時として慈善家の側面の方が強く出てしまっていた」(*Collected Works* 1: 177) ことだ。ギッシング自身は、スラム街を題材にしたのは、完全に芸術の題材としてふさわしいと考えたからある。ディケンズとは違い、ギッシングは、書くことによって問題を明るみにし社会を改善させよう、などという高邁な目的とは無縁だった。「二人の慈善家の作家たち」という記事でウォルター・ベサントとギッシングを並べて評したイーディス・シチェルへの手紙の中でも、ギッシング

ははっきりと『ネザー・ワールド』の慈善的意図を否定している。

It is my misfortune as a writer of fiction that English readers have so long been taught to look for the moral of such works, & especially in the case of stories which deal with the poor.... Now, were I, in a Preface, to say that 'the philanthropic movements of the day are nothing to me save as artistic material, & I care not in the least whether my books promote or discourage these efforts,' the result would be much surprise & more indignation. Yet I should have told the truth, & a truth which I had fancied self-evident.

(My underline. June 8, 1889, *Collected Letters*, 4: 75)

それでは、ギッシングはスラム街をどのように描いたのだろうか。ギッシングの『ネザー・ワールド』に出てくるシューターズ・ガーデンズは、トム・オール・アローンズと同様、架空のスラム街である。シューターズ・ガーデンズ以外の地名はすべて実在するクラークンウェル地区のものだが、シューターズ・ガーデンズだけは実際にはないのだ。クラークンウェルは、フェアリンドン・ロードや地下鉄のメトロポリタン・ライン敷設のためにサフロン・ヒルなどのスラム街が一掃されて以降、1870年代に一層スラム化が進んだ地区である。そのクラークンウェルの中でも一番奥の最悪なスラム街が、シューターズ・ガーデンズとなっている。その描写は次のようなものだ。

Needless to burden description with further detail; the slum was like any other slum; filth, rottenness, evil odour possessed these dens of superfluous mankind and made them gruesome to the peering imagination. The inhabitants of course felt nothing of the sort; a room in Shooter's Gardens was the only kind of home that most

of them knew or desired. The majority preferred it, on all grounds, to that offered them in a block of model lodgings not very far away; here was independence, that is to say, the liberty to be as vile as they pleased. How they came to love vileness, well, that is quite another matter, and shall not for the present concern us.

(*The Nether World*, Chapter 8)

ギッシングのこの描写からは、彼がスラム街の住人に全く同情的でないことが読み取れる。まるで貧民には感情がないかのような書き様で、彼らを切り捨てるような冷たさを感じる。ディケンズ作品に見られたような貧民に対するアイディアリズムも一切ない。物語の終盤で、シューターズ・ガーデンズの貧民救済のためのスープ・キッチン事業が貧民に受け入れられずに失敗に終わったときには

[C]an you not perceive that these people of Shooter's Gardens are poor, besotted, disease-struck creatures, of whom — in the mass — scarcely a human quality is to be expected?

(*The Nether World*, Chapter 28)

と書き、貧民の人間性を否定し、貧民を救済しようとする慈善家たちの試みをあざ笑っているかのようにも見える。

シューターズ・ガーデンズの住人たちについても、その描写はアイディアリズムとは無縁で、彼らの収入や労働時間からしゃべる言葉についてまで一人一人細かく観察し、社会学の資料のような正確さで描写する。たとえばペニロウフのお兄さんのスティーブンについては

Stephen pursued the occupation of a potman; his hours were from

eight in the morning till midnight on week-days, and on Sunday the time during which a public house is permitted to be open; once a month he was allowed freedom after six o'clock.

(*The Nether World*, Chapter 8)

と書かれている。スティーブンは物語の進行とは関係のない登場人物なのだが、重要であろうとなかろうと、シューターズ・ガーデンズのスラム街の住人一人一人について細かい描写がされているのだ。物語の本筋とは関係のない細かい人物描写が多いのは読者にとっては邪魔な情報に感じるが、一方でシューターズ・ガーデンズが、架空の場所とは思えないほどの現実性を持つようになる。空想の世界ではなく、現実にあるスラム街の本当の物語のように感じるのである。

ディケンズは、自分の書く小説には世の中を変える力があると感じてスラム街を描いた。しかし同時に、小説は第一義的に読者の楽しみでなくてはならないと考えていたため、極端に不快な描写は避けて物語を書いた。一方、ギッシングには慈善的な目的は皆無だった。彼は、スラム街の描写に関してディケンズを手本とすることをよしとはせず、新しい時代にふさわしい自然主義的な書き方をした。すなわち、どんなに醜悪な情景であっても避けることなく、淡々と正確に書いたのである。ディケンズのトム・オール・アローンズでもジョーが亡くなるが、その死はスラム街での問題に対処してこなかった社会の責任として描かれる。社会が変われば、スラム街の生活も変わるはずだ、という楽観主義が根底にはある。しかし、ギッシングの徹底的なリアリズムには救いがない。『ネザー・ワールド』では慈善家たちの努力はすべて失敗し、スラム街の住人はどんなにもがいても最後の最後までスラム街を抜け出すことはできない。これは『ネザー・ワールド』を書くきっかけとなったギッシング最初の妻ネルの死が影響しているのかもしれない。ギッシングは売春婦だったネルと結婚してから、彼女に本を読ませたり言葉使いを直し

たりして更生させようと努力したのだが、結局彼女はギッシングのもとを去って、アルコールと売春の生活に戻り、ランベスのスラム街で亡くなったのだった。スラム街を抜け出すためのどんな努力も無駄に終わるということをギッシング自身が身をもって感じていたのである。

『ネザー・ワールド』がイギリスとアメリカで出版された後に出た数々の書評では賛否が分かれたが、ギッシングの選んだ題材については概ね否定的だった。結局、*New York Daily Tribune* の書評に書かれたように、ギッシングの選んだ題材は「小説に向いていない」ということだった⁵⁾。多少「汚い」ものでも、オブラートにくるんで「きれい」な芸術に昇華させようとしたディケンズと、「汚い」は「汚い」ものとしてありのままに描いたギッシング。このような違いが、トム・オール・アローンズとシューターズ・ガーデンズの描写にも表れていた。

スラム街はギッシングにとって芸術のための題材が得られる場所だったはずだが、『ネザー・ワールド』を最後にギッシングは下層階級の人々を描く小説を書かなくなった。代わりに教育の問題や女性の自立などといった中産階級の人々の社会問題をテーマにした小説を書くようになったのである。ギッシングにとっても、スラム街は芸術の題材としては相応しいとは感じられなくなったのかもしれない。

《注》

- 1) "Dickens in Memory," *Collected Works of Gerge Gissing on Charles Dickens*, 1: 45-52.
- 2) ギッシングは、次の作品の準備としてブースの研究を読んでいたところ、偶然、『民衆』が推薦されていることに気がついたのだった。そのことについて妹に手紙で知らせている。"To Ellen," Dec 8, 1890, *Collected Letters*, 4: 249.
- 3) "Dickens tries his equivocal best to rouse indignant disgust without actually being disgusting." Blount, 344.
- 4) "Speech of Charles Dickens, Delivered at Gore House, Kensington, May 10, 1851," 8.

- 5) “New Publications”, *New York Daily Tribune* 18 June 1889, 8. Quoted in Coustillas, *The Heroic Life of George Gissing*, 2: 53.

参考文献

- Blount, Trevor. “Dickens’s Slum Satire in *Bleak House*.” *Modern Language Review*. 60 (1965): 340–51.
- Butt, John. “Bleak House in the Context of 1851.” *Nineteenth-Century Fiction*. 10. 1 (1955): 1–21.
- Coustillas, Pierre. *Gissing’s Writings on Dickens: A Bio-bibliographical Survey*. Enitharmon, 1969.
- _____. *The Heroic Life of George Gissing, Part II: 1888–1897*. Pickering & Chatto, 2012.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Penguin, 2002.
- _____. *Bleak House*. Penguin, 2003.
- _____. “Speech of Charles Dickens, Delivered at Gore House, Kensington, May 10, 1851.” Bibliophile Society, 1919.
- Gissing, George. *Workers in the Dawn*. 1880. Harvester, 1985.
- _____. *The Nether World*. Oxford UP, 1992.
- _____. *The Collected Letters of George Gissing*. Vol. 4. Eds. Paul F. Mattheisen, Arthur Young, and Pierre Coustillas. Ohio UP, 1993.
- _____. *Collected Works of George Gissing on Charles Dickens*. Vol. 1 Ed. Pierre Coustillas. Graywood, 2004.
- _____. *Collected Works of George Gissing on Charles Dickens*. Vol. 2. Ed. Simon J. James. Graywood, 2004.
- _____. *Collected Works of George Gissing on Charles Dickens*. Vol. 3. Ed. Christine DeVine. Graywood, 2005.
- _____. *London and the Life of Literature in Late Victorian Britain: The Diary of George Gissing, Novelist*. Ed. Pierre Coustillas. Harvester, 1978.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens’s London*. Robert Hale, 2010.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. Yale UP, 2009.
- Whitehead, Andrew. “George Gissing: ‘*The Nether World*’, 1889.”
<https://www.londonfictions.com/george-gissing-the-nether-world.html>
- ジョージ・ギッシング、『チャールズ・ディケンズ論』小池滋，金山亮太共訳，秀文インターナショナル，1992。